C－38 法衣の研究Ⅱ－五条袈裟及色衣について－

筑紫女学園短大　保刈禎子

目的　第1報に於て，法衣の意義，構成について述べ，特に五条袈裟をとり上げて報告した。今回は更に五条袈裟の縫製方法について調査した。又袈裟の下に着用する色衣は古代衣服の形態を現在にも伝える数少ないものの一つと考えられるので，その構成，縫製について，被服構成の立場より調査したので，併せて報告する。

方法　大正末期に製作された袈裟と，現在の袈裟を分解し，その構造，縫製を比較検討した。更に市販されている袈裟用金襴地で作製した。色衣についても同様の検討を試みた。

結果　袈裟本来の目的，意義からすれば，縫製は，「手縫いかえし刺し手法」と推察される。大正時代の五条袈裟でそれが明らかである。しかし最近の織物の発達により手刺し手法は困難で，現在の袈裟はミシンによる縫製がとり入れられ一部分に手刺しが見られた。布の割截（裁断）方法や縫製後の縫目の折り，飾り紐の付け方等は両者共通していた。

色衣は，広袖垂領形式で，衿は狭衿である，もともとは広衿であったので，僧綱衿として身頃より分離した。袖は広袖で，裳と共に単衣仕立であった。身頃は無双仕立てで袵，裾に特殊な縫製が見られた。これは本来は，袍と裳の二部形式の衣であったものを結合して一部形式の衣服形態にした為かと推察される。